

リーディングDXスクール事業【実践事例】

松阪市立米ノ庄小学校（三重県）【指定校】

【取組内容】 ルーブリックを活用した探究学習

1 テーマ

児童一人ひとりが学習の目的と評価を意識するルーブリックの活用

2 実践前の課題

・探究学習において、テーマ別に少人数のグループでの学習を進める場合がある。その際、個々に毎授業毎の学習の目的と評価について、どう持たせるかが課題である。また、他者と協働することで考えを深めたり、広げたりすることにつながるが、授業内の対面で協働する時間には限りがある。

3 課題解決に向けた実践の概要

- ・授業開始時は、各自がルーブリックを見ながら課題設定を行い、授業終了時はルーブリックを見ながら、振り返りと自己評価を行った。
- ・6年生の総合的な学習の時間に、探究学習モデルの4つの観点（「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」）それぞれに3段階（S、A、B）の評価基準を示したルーブリックを児童間で共有した。
- ・タブレット上で他者参照や共同編集ができるようにし、対面以外でも協働的な活動を行えるようにした。
- ・内容によっては 個人でなく、グループで共同編集し、課題設定や振り返りを行う場面も設定した。

4 実践のポイント

・ルーブリック

個々に毎授業毎のゴール意識をもたせることで、個々の課題に向か合っていくことができるとともに、自己評価をしながら振り返り活動ができる。

・他者参照

児童が探究の課題設定をする際、同じテーマで探究を進めている児童が設定した課題や自分が参考にしたい箇所を選択して自由に参照できることで、「自分の考えに自信をもつ」「間違いに気づく」「新しい考えが生まれる」等の効果が期待できる。

・共同編集

共同編集を行うことによって、児童のコメントが他の人に見られたり、他の人の役に立ったりする経験や、自分の考えをもてなかった児童が、他の人のコメントや学びの履歴を参照して、自分で考えをもつことができた経験につながり、自己有用感や自己肯定感を高めると期待できる。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

松阪市立米ノ庄小学校（三重県）【指定校】

【取組内容】 ルーブリックを活用した探究学習

5 成果と課題

(1) 成果

- ・児童がいつでも他者の考えを参照できる環境を設定したことで、児童が他者参照を行う場面が増えた。
- ・他者参照を行った児童は、自分の考えを再検討、再構成をしたことに加えて、他者の考えを踏まえ、さらに聞きに行く、質問をする、反論をするなど、次の行動につなげる児童も増えた。
- ・自己評価の際、ルーブリックや他者のコメントを参照することで、「何を指標にすればいいか」、「今の自分は、どれを参照すると学習がよりよいものにできるのか」を考え始めた。
- ・課題や振り返りの記述を見ると、当初は、長文でまとまりのない記述がみられたが、学習が進むと現状を踏まえ、要点を絞り、まとまった記述がみられるようになった。

(2) 課題

- ・共同編集の際、児童間にタイピングスキルの差があるため、入力時間の差が生じてしまい、児童のモチベーションを下げてしまう場面もあった。

6 資料

共有したルーブリック

	課題設定・めあて	情報収集	整理・分析	表現する	ふりかえり
とてもよくできた S	身近なところ（前回の学習や普段の生活）から課題を設定し、見通しをもってめあてを決めた。	自分に必要な情報を、校内（ネット、教科書、本、友だち、先生）だけでなく、校外（地域の人、関係機関）からも選択して、調べることができた。	情報を整理・分析して様々な視点で考えを持つことができた。	伝わりやすいように工夫して表現することができた。 （図、写真、色、配置、構成など）	具体的にできたこと、改善点、次の挑戦を考えることができた。
よくできた A	友だちの考えを参考に、課題設定し、めあてを決めた。	自分に必要な情報を調べることができた。	情報を整理・分析して自分の考えを持つことができた。	伝えたいことを明確にし、表現することができた。	できたことと次の挑戦を考えることができた。
もう少し B	なんとなく課題設定し、めあてを決めた。	なんとなく情報を集めた。	情報を整理・分析するのが難しかった。	伝えることができた。	できたことを考えることができた。
	文章＋評価（SAB）	評価（SAB）	評価（SAB）	評価（SAB）	文章＋評価（SAB）

リーディングDXスクール事業【実践事例】

松阪市立米ノ庄小学校（三重県）【指定校】

【取組内容】「知識スキル」と「能力スキル」の育成

1 テーマ

情報活用能力を多面的に育成する

2 実践前の課題

児童は各学年で様々な場面でタブレットを活用しはじめているが、児童の情報活用能力の差が、学習への意欲や学びのつながりに影響を与えている場面もある。具体例を2つ挙げる。

一つ目は、情報手段の基本的な操作の一つタイピングである。自分の考えをタイピング入力する場面では、考えをもっているが、タイピングが苦手な児童は、タイピングすることが目的となり、考えを出し合って議論をする前に意欲が低下してしまうことがあった。

二つ目は、情報の整理・比較に係る能力である写真の利用である。児童はタブレットで容易に写真を撮ることができるが、撮影した写真の扱い方（多くの撮影した写真から必要なものを選択する、写真の大切なところをトリミングする等）に差があると、その後の学習に影響がみられた。

3 課題解決に向けた実践の概要

本校児童において、育むべき情報活用能力を、プレゼンソフトの使い方、共同編集の仕方、写真のトリミング等の「知識スキル」と、正確に、素早くタイピング入力する力等の「能力スキル」に分け、これらを授業の中で習得させる実践を行った。

「知識スキル」については、単元のまとめ動画の作成、撮影した写真をまとめて使用する場面等で、教師がスキルのすべてを教えるのではなく、一つの使い方だけを教え、実際に活用する場面や、子どもたちが使い方を教え合う場面を設け、スキルの習得を目指した。

「能力スキル」については、タイピングソフトを活用し、年間を通して、休み時間に自由に活用できる場面や、クラスでタイピングコンテストを設け、子どもたちの意欲を高めながらスキルの習得を目指した。

4 実践のポイント

「知識スキル」

・基礎から発展

授業で動画づくりに関わる「知識スキル」を習得した後、これらの「知識スキル」を活用する課題を例えば、長期休業の家庭学習に課し、児童が自由に知識スキルを活用する機会を設定した。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

松阪市立米ノ庄小学校（三重県）【指定校】

【取組内容】 「知識スキル」と「活用スキル」の育成

・ 成果物の共有

習得した知識スキルを利用した児童の成果物は、クラス全体で共有し、よりよい活用のイメージを児童に意識させた。

「能力スキル」

・ 履歴の活用

タイピングの結果はタブレットに記録し、過去の自分の成績と比較できるようにした、

・ 継続した意欲を高める工夫

クラスでコンテストを定期的に行った。結果によって5段階の認定書（生成AIで作成した画像を取り込んだ認定書）を用意し児童の意欲を高めた。

5 成果と課題

(1) 成果

「知識スキル」については、教え込むことは極力避け、友達の活用の様子を見たり、自ら活用したりすることで、児童は知識スキルを柔軟に増やしていった。また、スキルの活用が学習方略の一つとなり、その後、様々な学習活動の中で、スキルを活用する姿がみられた。

「能力スキル」については、クラスのイベントとして位置付けることで、子どもたちの意欲を継続させることができた。

(2) 課題

「知識スキル」の習得に比べ「能力スキル」の習得には一定の時間が必要で時間がかかる。児童によっては継続して取り組んでいるが、なかなかスキルを習得できない場合もある。

継続的に児童の意欲を保つために、教室環境、保護者の協力等さらなる工夫が必要である。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

松阪市立米ノ庄小学校（三重県）【指定校】

【取組内容】 チャットから始める校務DX

1 テーマ

チャット機能を活用した情報共有

2 実践前の課題

これまで、打合せ、職員会議、校内研修等では、一部の資料は印刷して配布しており、配布に要する時間（資料を印刷する時間、配布する時間）がかかっていた。また、職員室で連絡を行う際に、不在の教職員には、あとからメモを渡したり、口頭で伝えたりするため、効率的な情報共有ではなかった。また、職員用タブレットには様々なアプリ、ソフトが実装されており、授業等での活用の頻度は上がってきた。一方で、教員間の情報共有については、いくつもの場所で情報共有が行われており、情報を見逃したり、情報がどこにあるかわからなくなったりすることがあった。

3 課題解決に向けた実践の概要

最初に、情報共有の窓口はチャット機能を活用して一元化を図った。提案者の共有事項はシンプルにチャットに入力し、資料は別添したり、格納してあるリンク先を示したりした。

また、教職員が、情報を閲覧するだけでなく、様々な立場から積極的に情報共有をしたり、情報を閲覧したら、確認済みを示すためにスタンプを押したりすることを推奨し、操作に慣れる、活用する機会を設けた、

4 実践のポイント

・情報共有のプラットフォーム

校内の情報共有はチャットに記入し、教職員はまずここを見れば必要な情報をえることができるようにした。

また、情報共有した内容は時系列で残るため、いつでも過去に遡り確認できる。

・教職員一人ひとりのペースで活用

教職員は、教員用タブレット、職員用PCで情報共有された内容を閲覧できるので、教職員のタイミングでいつでも、どこでも情報共有が図れる。

・情報共有の徹底

閲覧した教職員はスタンプを押すことで、確認状況が分かる。そのことで、未確認の教職員だけにリマインド等を伝えることができる。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

松阪市立米ノ庄小学校（三重県）【指定校】

【取組内容】 チャットから始める校務DX

5 成果と課題

(1) 成果

実践当初は、共有事項が毎日あるわけではないため、新規の情報が掲載された際、情報を見逃してしまう教職員もいた。そこで、その際は、職員室の大型モニタに新規情報が掲載されたこと映し出し、教職員の見逃しを減らせることができた。

慣れる、活用する機会を推奨したことで、徐々に教職員間でチャットを活用した情報共有ができるようになった。

(2) 課題

1年をかけて新しい活用を進めてきたが、教職員が日常的に活用するためには時間がかかる。公立学校では毎年4月の教員の異動で教員の入れ替えがある。4月には一度活用率は下がってしまう。今後もより、教職員が慣れる、活用するための工夫は必要である。

6 資料（成果物）

一般 投稿 ファイル Plc Notebook + □ ▾ ... □

川 月曜日 12:13

[連絡] teamsでの連絡の仕方について

これから基本的な連絡はteam s チャットを活用していきたいと思います。
目的は「会議打合せ時間の短縮のため」です。
軽微な連絡等はこちらで共有することで
・先生方の自分の時間場所で確認できる
・記録をいつでも見直せる
・軽微な連絡はteam s で行い、対面時に時間をかけたい事案（子どもに関すること・学校全体に関する事など）に時間が取れると思います。
現在タブレットがない方もいらっしゃいますので、共有のタブレットを準備できるように進めておりますのでこの点もお知りおきください。
ご協力をお願いします。

👍 7

返信

「いいね」で参加確認と参加への一歩